

<編集後記>

国際シンポジウム「グローバルディアスポラ経済
と文化的理解」の寄稿論文に寄せて

守 政 毅

グローバル化が進展する中、東アジアにおける地域の一体化、地域経済共同体の形成や企業の多国籍化の動きが強まっている。特に、人々の国際移動と人格的信頼関係を基礎としたネットワークを拡大・深化が、東アジアでの域内共同体形成を促進したといえよう。海外経験を持ち、国際的視点や経営ノウハウなどを備えていた日中韓の企業家は、彼らの持つネットワークを駆使しながら東南アジア、中国、香港、台湾で海外事業展開を積極的に行うことで、東アジア企業のグローバル経営が可能となった側面も無視できない。また、近年では中国本土企業の「走出去（海外進出）」においては、華人ネットワークがアジア市場進出の架橋機能を果たしている。しかし、日中韓の企業家ネットワークには、独自の歴史・文化を背景としたコンテクストが内包されており、東アジアの企業家ネットワークを通じた多様な経済連携のメカニズムを比較検討することが強く求められている。

以上のような問題意識の下、立命館大学学内提案公募型研究推進プログラム基盤的研究「東アジアにおける華人・中国・韓国・日本の海外企業家ネットワークの形成・拡張に関する比較研究」（2008～2009年度）が展開された。そして、研究の国際化をさらに推進するため、2008年7月26日に、韓国国立全南大学校世界韓商文化研究団の林永彦教授を招聘して「第1回東アジア企業家ネットワーク研究会」を開催した。報告を基にした論文「在日コリアン企業家の起業動機と起業類型化研究」は、『立命館国際地域研究 第28号』（2008年12月）に収録されている。

また、2009年1月17日には、韓国国立全南大学校世界韓商文化研究団、中国厦門大学南洋研究院、立命館大学国際地域研究所が共催し、「グローバルディアスポラ経済と文化的理解」を統一テーマとした国際シンポジウムを開催した。研究発表は、「海外華僑の文化と経済」、「東アジアにおける企業の国際化と異文化マネジメント」、「コリアン・ディアスポラ」の3分科会を設け、全南大学校からは崔錫信教授、張崙洙教授、羅洲夢教授、張禹權教授、厦門大学からは王望波副教授、施雪琴副教授、立命館大学からは中川涼司教授、SCHLUNZE ROLF

DIETER 教授が報告を行った。また、2つの大学院生セッションも設け、全南大学校からは京成林さん、姜園さん、立命館大学からは方帆さん、金紅梅さんが報告を行った。12名の研究報告に対して、日中韓の3言語の通訳を介してフロアとの活発な議論が展開された。本紀要に収録された諸論文のうち、王望波、施琴雪の両氏による2編は、同シンポジウムでの報告を基礎にしてグローバルな国際人口移動と華僑経済の一端を明らかにしており、プロジェクトの研究成果を示すものである。

同国際シンポジウムの開催に当たっては、開会挨拶として大久保史郎国際地域研究所所長（当時）、閉会挨拶として林采完全南大学校世界韓商文化研究団団長、コメンテータならびに司会として西口清勝経済学部教授、松野周治経済学部教授、鄭雅英経営学部准教授にご担当いただいた。また、同国際シンポジウムの開催に対し、全南大学校世界韓商文化研究団、立命館大学国際地域研究所、立命館大学コリア研究センター、西口清勝経済学部教授、文京洙国際関係学部教授からも多方面でご支援を賜った。諸準備・運營業務では、林永彦全南大学校世界韓商文化研究団教授、鄭雅英経営学部准教授、楊秋麗経営学部講師、上田和香衣笠人文社会リサーチオフィス職員に大変お世話になった。各機関、諸先生、職員のご理解とご支援がなければ、このような国際シンポジウムは無事に開催できなかったであろう。この場を借りて改めて御礼を申し述べさせていただきたい。

最後に、東アジアの域内連携がますます加速する中、域内連携の実態を浮かび上がらせる人々の移動と、歴史・文化を背景とした民族ネットワーク、そこから生まれる東アジア多国籍企業の事業展開と経済力は、世界と地域の経済社会の発展に寄与しており、研究上でも大変重要な意義を持つ。これまでの研究交流の成果と本号で収録された諸論文が、こうした研究課題の達成に何らかの貢献ができたのであれば、幸いである。